



大原美術館後援会会報

丸窓

[第25号] 2021年6月

〈掲載情報〉

- ・大原美術館からの報告
- ・私が選ぶ この1点
- ・広報室より など

発行:大原美術館後援会事務局

目 大原美術館からの報告①

大原美術館オフィシャルパートナー制度について

副館長 森川政典



岡山県では緊急事態宣言が解除され、少し明るい兆しが見え隠れする中ですが、まだまだ厳しい社会環境が続いていると受けとめています。このような中で、大原美術館後援会の制度も見直しを行いました。法人会員のみなさまには、「オフィシャルパートナー制度」として会員証ではなく、社名入りのオリジナル入館券をお渡しする形に変更します。今までにいただいた「1枚の会員証では多くの社員が利用しづらい、直接入館できないか、大切なお客様にも広く案内したい」等々の貴重なご意見を参考に、検討を重ね今回の変更にいたしました。本来、更新月に合わせて変更のご案内にお伺いするべきところ、急な臨時休館などで思うように動けず、少しお時間をいただきながらご説明にお伺いしております。令和3年度から毎年3月末を期限とした“1年間有効のオリジナル入館券”を制作することで、引き続き大原美術館の「夢」へのご協賛を賜り共に歩んでまいりたいと願っています。法人会員のみなさまにはこの会報紙「丸窓」のお届けは、今回が最後となります。今後新たな情報発信も模索する中、新しい魅力創出に向けて全力で取り組んでまいります。個人会員のみなさまはこれまでの個人会員証をご利用いただくことで何ら変わるものはありません。引き続きの利用促進含めたお力添えをお願い申し上げます。



オリジナル入館券イメージ

目 大原美術館からの報告②

「みんなのマイミュージアム」

——大原美術館は開館100周年に向けて新しいスローガンを掲げます

理事長 大原あかね



©才士真司



デザイン:田中雄一郎

平素より大原美術館をご支援賜り心より御礼申し上げます。皆さまからいただく温かいメッセージは、職員にとっても、厳しい状況を乗り越える力の源となっています。

さて、昨年開館90周年を迎えた大原美術館ですが、100周年に向けて「みんなのマイミュージアム」をスローガンに掲げることいたしました。入館料が収入の大きな柱となっている大原美術館は、本当の意味での「民による」美術館です。そして私たちはすべての鑑賞者のための開かれた美術館でありたいと思っています。でも「すべて」という言葉でかき消される小さな声があることも忘れてはなりません。大原美術館にかかわるすべての方にとって「私の美術館」と感じていただきたく、「みんなのマイミュージアム」といたしました。

後援会会員の皆さまには、すでに「マイミュージアム」として親しくお付き合いいただいておりますが、もっと多くの方にとっても「マイミュージアム」となれるように、日々の活動を進めていく所存です。スローガンを掲げるにあたり、ロゴマークも作りしました。何にみえるでしょうか。ハート？とり？あしあと？ふきだし？…何に見えるかは見る方の自由。100人いれば100通り、そんなロゴマークです。色についても規定していません。大原美術館にかかわるすべての人に、自分なりの大原美術館をこのロゴマークに託してほしい、そんな願いも込めました。多くの皆さまに親しんでいただければと思っています。

私が選ぶ この1点

後援会法人会員(オフィシャルパートナー)の企業・団体様にご協力をお願いしてポスターを製作している「私が選ぶ この1点」。取材内容をこの紙面でもご紹介します！

株式会社中国銀行 取締役会長 宮長雅人氏



印象派の絵が好きで、特にモネの「睡蓮」が気に入っている。印象派の画家たちは、それまでの画壇の主流であったアカデミーの画家たちとは違って自らの感性を大切にした。当初は全く受け入れられなかったが、信じる道を進み美術の世界にイノベーションを起こした。その姿勢に惹かれるし、そういったことを抜きにしても、それぞれの個性ある作品が理屈なしに好きだ。池の水や睡蓮の葉の青と緑、そして水面に映る庭の草木。光の加減で濃淡が付き、穏やかな印象を与えてくれる。モネはわざわざジヴェルニーの自宅に睡蓮の池をつくり、生涯200点以上の睡蓮を描き続けたことで有名だ。いつか、そのジヴェルニーへも行ってみたい。

クロード・モネ 《睡蓮》
73.0×92.5cm 油彩、画布 1906年頃

広報室より

水島臨海鉄道とのコラボ企画について

広報担当 佐々木梢



双方の周年ヘッドマークを装着した車両



記念硬券セット

美観地区のある倉敷市の中心街と水島臨海工業地帯を結ぶ鉄道、水島臨海鉄道のことはみなさまご存じでしょうか。旅客と貨物の輸送を担う鉄道として1943年に旧三菱重工水島航空機製作所によって開業。戦後には倉敷市交通局が運営する公営鉄道となり、1970年に現在の水島臨海鉄道株式会社に。2020年2月には、設立50周年を迎えました。近隣の方からは開業当時から『ピーポー』という愛称で親しまれています。

COVID-19による外出や移動の自粛で美術館も鉄道業界も大打撃を受けていますが、こんな時だからこそ「一緒に倉敷を盛り上げたい！」という気持ちで話し合いを始め、昨年11月からさまざまな企画を行いました。大原美術館の開館記念日である11月3日には90周年記念ロゴのヘッドマークを着用した車両が登場し、約1カ月走行。水島臨海鉄道倉敷市駅では、入館券と1日フリー乗車券をセットにした記念硬券セットの販売や大原美術館オリジナルグッズの入ったカプセルトイが設置され、開館90周年を彩っていただきました。

残念ながらCOVID-19の影響で華々しいことはできませんでしたが、これからも倉敷を盛り上げられるような楽しい企画を一緒に行っていこうと計画しております。ご期待ください。

ミュージアムショップより

新装開店オンラインショップ

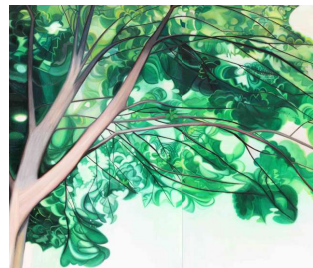
大原美術館のミュージアムショップが、新たな店舗を立ち上げました！…オンラインで。

現在も大原美術館のサイトの中にミュージアムショップのページはあるのですが、新しいサイトでは、1点1点の商品の画像を掲載しており、ご自宅やオフィスで飾ったらこんな感じ、というディスプレイのご提案もしております。また、クレジットカードによるオンラインでの決済が可能となりました。不要不急の外出を控えることが多いこのご時世ですが、オンラインのミュージアムショップへはぜひお気軽にお立ち寄りください。

オンラインショップへはこちらからどうぞ→



表紙の絵



押江千衣子 《こだま》
227.3×290.8cm オイルバステル・画布
2009年

大きな木に茂った鮮やかな緑の葉が、眩しい光に照らされ輝いています。描かれているのは、児島虎次郎の旧宅である倉敷市酒津の無為村荘内に生えている楓の木です。押江千衣子はARKO2008の滞在制作で、このきらめきを描き留めました。一枚一枚の葉の個性を丁寧に描きとったかのような本作は、新緑の季節にふさわしい、さわやかな生命力に満ち溢れています。